

Taegu Textile Art Documenta 2007 報告



展示会場の大邱文化芸術会館



会場風景
手前Chang Yeon-soon
後ろ壁面右よりHur Nam-moon
Park Eun-mi Yun Pil-nam



作品説明するKari Dyrdal氏 壁面Soe Hyun-hwa



学術セミナー
右よりYoo Sun-tae、筆者、張東光、
Kari Dyrdal、Mark Newportの各氏

2007年11月13日から25日まで韓国大邱市（テグ）大邱文化芸術会館全館でTaegu Textile Art Documenta 2007が開催された。私は海外招待作家として、Mark Newport（アメリカ・クランブルック教授）、Kari Dyrdal（ノルウェー・ベルゲン国立芸術大学教授）らとともに作品出品、国際学術セミナーで発表の機会を得た。

2003年に創立され今年で3回目を迎えるTaegu Textile Art Documenta 2007は、ゲストキュレーターに張東光氏を迎え‘The Echoes of Resonance’（共鳴の響き）というタイトルのもと、現代繊維の多様性を追及し可能性を探るため「国際繊維芸術展」「韓国伝統文様テキスタイル公募展」「国際学術セミナー」で構成された。

繊維という領域に特別な刺激が加わるとどのような波状が起きるだろうかという問題に着目して企画された今回の国際繊維芸術展は、本展‘Mainstream’（韓国内外の繊維芸術家と映像作家の作品）と特別展‘Aperto’（35歳以下の12人の作家）とに分かれ総勢60人あまりが出品した。本展は三章で構成され、第一章「Route_古い道を問う」は、歴史と伝統に根ざした作品、第二章「Road_新しい道をつくる」は、繊維の性質を効果的に生かした作品、第三章「Way_他所に向う」は脱領域的傾向、すなわち建築、映像、衣服など隣接領域との交叉に着目した作品を展示した。国際学術セミナーは‘Matrix to the Future’（未来への回路網伝統_メディア_社会）という主題で海外招待作家3人とYoo Sun-tae造形芸術博士が参加して、作品プレゼンテーションと現代繊維芸術界の動向についての討論会が4時間あまり行なわれた。

繊維・ファッション産業の中心である大邱市は、繊維産業の競争力強化に力を入れている。繊維芸術の多彩な展開と流れを一堂に展示した今回の展示会を通じて、新しい可能性を模索しようとする試みは、大邱市の将来を示唆するには有意義な展示会となり、教育現場、産業界に刺激となり、結果的には産業界の創造に深く共鳴するきっかけになるだろう。

日本では美術界全体が沈滞するなか、隣国韓国や中国で活発に開催される大規模な国際展にアジア人として大きな期待と誇りを感じるとともに、展示会の主要舞台が西欧からアジアへ推移していることに時代の変遷を感じる。
(小野山 和代)